

晴佐久昌英神父銀祝ミサ

2012. 10. 8

使徒 2・36-47

マルコ 16・14-20

神はすべての人を救われる

この聖堂で、高円寺教会の素晴らしい仲間たちと25周年のミサを捧げられる、しかもかつて一緒に働いた澤田神父さま、寺西神父さま、マルセリーノ神父さまを迎え、さらにはこの聖堂で育てられた大西助祭と一緒に捧げられるというのは、本当にうれしいこと。ここは自分にとって特別な聖堂ですし、また洗礼をここで受けた人にとっては、この祭壇前は特別の聖地でもあるはずでしょう。うまく言えませんが、そんな所でこうしてみんなと一緒にミサをささげられるということが、司祭としてどれほど嬉しいかということは分かっていたきたい。

この前ふと気付いたんですけど、わたし、人生で一番長く暮らしたのは高円寺なんですよ。物心ついてからですと本郷に7、8年、それから立川、小平、東村山、練馬の神学校、後は各教会ですけど、ここは助任で3年、その後出戻り主任で6年暮らして、計9年。わたしの人生で一番長いんです。今後もこれは更新されないんじゃないかって気がしますよ。まあ、ペトロの家あたりで(笑)もしかするとことはあるかもしれませんが、あそこが満杯だったら、ここにまたお世話になりに来るかも。そうすればさらに記録更新。

わたしの人生において、この地、この聖堂は特別な所です。ここで、神さまのみ業は本物だっていう確信がいつそう強まったからです。何よりも大勢の救われる人の姿、特に洗礼式によって。これは強烈でした。ああ、本当に神さまは働いておられるなと感動したのです。さっき福音書で、「弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを、それに伴うしるしによってはっきりとお示しになった」と読まれましたけど、わたしはここでミサをささげ、み言葉を語り、信じる仲間が集まって福音に涙する姿を見てきましたし、求道者が増え、入門講座で心を熱くして信仰に導かれ、この祭壇前で洗礼を受ける姿を見てまいりました。それこそがその「しるし」でしょう。そのしるしによって、神のわざは本物だっていうことに確かに気付かされ、教会の語る言葉が真実であることをはっきりと知って、いつそう確信を深めてきた。私もまた、この聖堂で育てられたのです。

こうしてここでミサを捧げていると色んなことを思い出しますけれども、それら一つひとつのできごと全てが、あれこれの辛かったことも含めて全部、神さまがちゃんと見せてくれた、尊いしるしだったってということです。

今日のこのような集いに招かれたとき、本当は気後れしたんです。吉池神父さまから「高円寺で25周年の記念ミサを」とお招きいただいて、うれしい反面、正直、なんだか申し訳ないなあという気持ちがあった。しかしその後、わたしが在任中の受洗者全員にご案内のハガキを出したって聞いて、俄然テンションが上がりました。(笑)「そうだよ、そういうことだよ」って思ったから。つまり、「自分が25周年のお祝いをされるっていうようなことではなくて、神さまがなさっておられる素晴らしい業を祝うんだ。その業に改めて感謝し、このような機会にいつそう目に見えるしるしとして祝うって、大事なことだ」と気が付かされた。一個人の私がどうこう思うっていう種類のことでない、と。

大勢の方に、この祭壇前で洗礼をお授けしました。まごころ込めて福音を語りましたし、全員と丁寧に面接もいたしました。覚えておられるでしょう。入門係も熱心に寄り添いましたし、その意味では「ひとり一人」でしたよね、やっぱり、救いに導くということは。でも、それが一年たつと何十人という群れになって、救いの涙をたくさん目の当たりにして、その現実はそれこそ神の業でした。これは人のやってることじゃないと思えたし、そんな神の業に奉仕できることこそ教会の喜びであり、司祭冥利に尽きるとも思った。

もっとも、洗礼は受けたものの次第に熱は冷め、「あのときの熱い思いはどこへ行ってしまったのか」っていう人も、もしかするといるかもしれない。「信仰って何だろう、この試練の中でなおも信じるってどういうことだろう、将来が不安でこれからどうなって行くんだろう」、そんな迷いや恐れが生まれている人もいるかもしれない。だからこそ、今日、ここに、神さまが集めてくれたんですよ。いわばメンテナンスです。車検みたいな感じです。あのころ洗礼を受けた方こそ、もう一度集まって、信じる思いを新たにしようじゃないかと。

そんな受洗者を始め、今日集まってくれた高円寺教会の皆さんに、この恵みの時に申しあげたい。みなさんを、神さまが望んで生んだんですよ。神さまが働いて育ててくださったんですよ。神さまが導いて洗礼を授けてくださったんですよ。そして神さまが今日、ここに集めてご自分の愛を語っておられるんです。そのことを、もう一度きちんと受け止めてほしいし、今もし辛いとか、恐れているとか、迷っているという方がいたら、わたしは「恐れるな」と言いたい。イエスに代わって、神さまに代わって、そう申し上げたい。「何ひとつ恐れ

るな、あなたはもう救われている」と。

25年間ひたすらに福音を語ってまいりましたけれども、25年もたつとだんだん怖いものが無くなってきたっていうか、今までいろいろ遠回しに言ってきたようなことを、もっとストレートに言っちゃおうっていうような気持ちが強くなっていて、一年くらい前から、かなりはっきりと「全ての人が救われる、救われている」ってことを宣言し始めました。こういう言い方は時に神学的に誤解されることがあるので気を付けて話していたんですけど、それで本当に救われる人があまりにも多いので、誤解を恐れて腰が引けるのも怠りの罪かと思うようになったということです。

これはね、プロテスタントの方たちのおかげもあるんです。最近、私のもとにプロテスタントの信者さんや牧師先生が大勢来られるようになり、また教会や大会に呼ばれるようにもなって、明日も横浜でプロテスタントの講演会がありますし、気が付くと最近、カトリックよりもプロテスタントのほうが多いんですよ。(笑) 今月だけでも2つありますし、来月も長野の諏訪で日本キリスト教団の大会があつて行くんですけど、せっかく来るんだつたら是非前日に来てくれと同じ長野の飯田の教会からも招かれて、2日連続になりました。

では、彼らが私なんかから何を聞いたがっているかって言うと、「みんな救われる」という福音なんです。「どんな罪人でも救われる」「あなたも必ず救われる」「あなたの大切なあの人もこの人も、みんな救われている」と。「これから何か努力して救われるんじゃないよ」と、「もう今、救われてることに目覚めてほしい」と、「イエスは死んで復活し、その救いの御業によって、あなたはすでに救いの内にある、あなたに永遠の命を授けている。それに気付いてくれ」というメッセージです。

これはもう、皆さんは私の説教や講座でずいぶんお聞きになったでしょうから「いつもの話」と思うかもしれないけど、プロテスタントの方にとっては新鮮に聞こえるようですし、カトリックでもちゃんと語られていないことも多いようですし、今、なんとなく教会に元気がないように見える中、今こそ全教会がそういう福音を求めているんだっていうことを、私は確信しています。

ここで肝心なのは、「あなたはもうすでに救われている」ってことです。「なんだ、それなら恐れることはなかった」って気付けばいい。「洗礼を受けたから救われるんじゃない。救われているから洗礼を受けるんだ」っていうフレーズは全員叩き込まれたはずですよ、晴佐久神父から。「あなたが何かしたから救われるんじゃない、神の望みによって、神の尽きせぬ愛によって救われるのだ」と。そこは徹底して、もう一度新たにしてほしい。

先ほど読まれた「使徒たちの宣教」でも、「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまりわたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられている」って、ペトロがそう宣言した。こういう宣言からキリストの教会は始まっているんですよ。「神が招いてくださる者ならだれにでも」と。当然ながら神さまは全ての人を招いているわけですから、もう既にその救いの約束がちゃんと与えられている。「イエス・キリストの名によって洗礼を受け、聖霊を受ける」っていうのが、約束の実現。この約束はもう皆さんに与えられているし、実現しているし、それに目覚めて洗礼を受け、聖霊に満たされたときにわたしたちは本当に救われる。イエスを信じたから、救ってくれるわけじゃない。罪深いこんな私を救ってくれたイエスを、信じるんです。「イエスを主として信じ、その信仰を告白すると救われる」という言い方が本当に表しているのはそういうことなんであって、これを文字通りの狭い意味でだけとらえていると、罪深い私たちはいつまでも救われない。

このことを、「天の救いと地の救い」というキーワードで最近お話ししているので、今日はそれをぜひ覚えて帰ってください。どうせ、っていうのもなんですけど、こういう説教ってそのうち忘れちゃうものですから、キーワードだけでも覚えておいてほしい。「天の救い」と「地の救い」です。

まず、「天の救い」とは、神さまが天地創造の初めからすべての人に与えてくださっている救いです。天の父が愛する神の子全員に与えている救い。子どもっぽく言うならば「すべての神の子は愛されているから天国に入れるよ」っていうようなことで、それは人間が何をしようがしまいが、怠け者だろうが罪深かろうが、何教だろうが何人だろうが、そういう人間の条件には一切関係のない恩寵の救いであって、もとよりあり、普遍的で、永遠です。その素晴らしさ、その方法、その全容は人間には決して分からない。神だけがご存知の神秘であって、われわれはただそれを信じるのみ。大事なことは、神の愛は全ての人に及び、愛による救いがすべての人に与えられているということ。考えてみればそもそも全能の神が愛して私を生んだんだから当たり前なことなんですけど、これをわたしは「天の救い」と呼びます。

ところが、この救いに気づいていない人があまりに多い。気づいていないから、悩んだり恐れたり、自分をおとしめたり争ったり、この世のものにすがったりこの世のものに支配されたりするようになる。いわば「罪」ですけど、「天の救い」に気づかないがためにそのような罪にとらわれて苦しんでいる人類を「罪から救う」ために、イエス・キリストを遣わして、天の救いを示してくだ

さった。それによって私たちは天の救いに目覚め、救われたのです。この救いを「地の救い」と呼びたい。

ひとことで言えば「天の救いに目覚めることが地の救い」なのです。

それがどれほどありがたい救いであるか。闇の中にいると思い込んでいた人が、イエスの御言葉によって魂の目を開かれ、キリストの死と復活によって神の愛に目覚め、自分は光の子だ、永遠なる存在だと気付かされる。自分が天の救いにもうすでに与っていることに目覚める。それがどれほど嬉しいことか。

このように、天の救いを信じて地の救いが実現したことのしるしが洗礼なんであって、決して「洗礼を受けたから天の救いが与えられる」のではない。天の救いという意味においては、実は全ての人がすでに神の愛のうちに「天の洗礼」を受けているんだと、わたしはそう宣言したいのです。そういう言い方で言うならば、「天の洗礼に目覚めて信じた者が、地においても洗礼を受ける」ともいえる。

ちょっと、そこを整理していただきたい。「信じる者は救われる」っていうときに、「信じる者は天の救いを得る」って思っちゃったらいけないんですよ。「天の救いを信じる者は、地の救いを得る」んです。そのところでプロテスタント教会も非常に混乱しているし、そのところでカトリック教会でも行き詰っている現場がたくさんある。イエス・キリストが「あなたの信仰があなたを救った」というときは、「地の救い」のことを言っているのです。

今週「信仰年」が始まりますが、バチカン公会議50周年、「カトリック教会のカテキズム」発布20周年ということです。

わたし思うに、このバチカン公会議は、「救いを救った」んだと思っています。せっかくイエスが天の救いをすべての人に開いたのに、いつしかさまざまな人間の条件の内に閉じ込められてしまっていた救いを、ふたたび普遍的な救いへと解放した。そうして、全ての人に救いが及んでいるということをなんとか現代の人々に示そうという、教会の神学的かつ実践的な苦闘の歴史が始まったんです。まさにバチカン公会議から。その旅路を歩み続け、神の国の実現のために、次の公会議までの間、果たすべき役割をきちんと果たし、より普遍的な救いについて示す苦闘を忍耐強く続けなければカトリックじゃあないでしょう、と思う。

その「カトリック教会のカテキズム」を開くと、こう書いてある。

「教会はだれ一人滅びることのないように祈ります。確かにだれも自分で自分を救うことはできません。これと同じく確かなことは、神はすべての人々が救われることを望んでおられ、神には何でもできるということです(1058より)」。

「神は全ての人々が救われることを望んでいる」。これは聖書の、テモテへの手紙の中にある言葉です。そして「神には何でもできる」。これは、マタイによる福音書のイエスの言葉です。弟子が「それではいったい、誰が救われるのだろうか」と言ったときにイエスが、人にはできないが神にはできると言って、「神には何でもできるからだ」と言った。この、テモテとマタイが並んでると、かっこいいじゃないですか。「神は全ての人々が救われることを望んでおられる。そして、神には何でもできる」って、これ、言ってることは唯一ですよ。「神は全ての人を救われる」。

公会議の美しい実りであるこういうカテキズムに励まされて、自分は救われないって恐れている人や、こんな自分はだめだと自分をおとしめている人に、きちんと福音を宣言しなければなりません。天の救いに気づいていないのが、罪の状態です。

「神の裁きによってこの世界に恐ろしいことが起こるんじゃないか」。「人類には罰が当たっているのではないか」。「これほどに世界が悪に満ちているのを見ると、神なんていないんじゃないか」。「神に見捨てられて、わたしは救われないんじゃないか」。「それではいったい、だれが救われるのだろうか」。

神の愛を知らずに恐れるそんな日々こそが、罪の状態です。とりわけ災害のとき、放射能の日に、私たちはいとも簡単に絶望しかけてしまう。しかし、もしもわたしたちが今、神の愛を見失って「恐れ罪」に捕われているなら、まさにイエスという「生ける天の救い」を信じてほしい。神はすべての人を救うという真理に立ち戻ってほしい。そして、今ちょうど窓の外でパッと陽が差して明るくなったように、心を明るく前向きにしていきたい。神のなさっておられるのは裁きではなく救いの業なんであって、わたしたちはそれを信じて受け入れるということで神の国に協力出来るんです。信じている人の顔、輝きますよ。その輝きによって、仲間がもっと集まってきますよ。

覚えました？「天の救い、地の救い」。ついでに「人の救い」ってのもあって、これで「天地人」になるわけですけど、「人の救い」っていうのは、病気が治るとか、事故に遭わないとか、そういう自分に都合のいいこの世の救いのこと。俗にいう「ご利益」です。「信じれば救われる」を、この人の救いとするなら、それはご利益宗教ってことです。とはいえ、「信じる者は救われる」を天の救いとしてしまうなら、これは原理主義のカルト的宗教ってことになります。これこそ傲慢な罪ですよ。恩寵である天の救いが、人間の業や、人の世の特定の宗教や教義によって規定されるなんてことはあり得ない。

「信じる者は救われる」とは、地の救いのことです。普遍的な天の救いを信じて、天の救いそのものであるキリストとひとつになり、この世ですでに天の

国に目覚めるといふ、地の救いを生きていきましょう。そのとき、天地創造の初めからある天の救いが地において啓かれるのです。

わたしたちはみんな、やがて必ず神の国で共に宴を囲むことができます。わたしたちの弱さ、罪、それらを全て神さまが良いものに変えてくださるのです。一人残らず。それを知って信じるのが、その準備期間であるこの世をほんとうに良いものにしていく。このように、あらゆる宗教を超えて、この真理に全ての人の魂が目覚めていくこと、そのためにわたしは司祭生活26年目からを捧げたいなあと、そう思っているところです。救いの歴史は続いていきます。

ここにおられる寺西英夫神父が銀祝のとき、わたしは神学生でした。この寺西英夫とか吉池好高とか、ずいぶんお世話になりましたが、このたび、そんなわたしも銀祝になったとき、大西勇史は神学生です。そんな彼もやがて銀祝なんてくるんでしょうね。(笑) そのころは、もうちょっと大人の顔になってるでしょうが。わたしのようですね。(笑)

わたしが神学生のころは、ほんとはしゃいで、どうしようもない神学生でした。ちょうど一週間前に、出身教会である小平教会でも25周年をお祝いしてくれるっていうんで喜んで行ってまいりましたが、神学校に入るときのわたしの推薦司祭は、当時の主任司祭の小林五郎神父さんでした。神学校に入るには、「神父になりたい」って所属教会の主任司祭のもとに行ってお願ひして、その司祭がOKしないと神学校に行けないんです。ちょうど2日前がわたしの父の命日で33回忌でしたけれど、わたしが21歳の時、晴佐久文夫が突然のように死んじゃって、「ああ、これから俺どうしよう」って思ったときに、「もう、神学校行くしかない。親父が死んだのはそのためだ」とそう信じて、ふた月後には小林五郎のところに行きました。

朝、ミサの後、「お話しがあります」と言ったら、「なんだ、まあ、上がれ」と司祭館に通され、おずおずと切り出したんですよ、「神学校に入りたい」と。さあ「OK」と言ってくれるか、「お前なんかじゃだめだ」って言われるのか、ドキドキしながら切り出したら、小林五郎がまず言った言葉は、「そうか、それじゃあ俺とお前は今日から仲間だ」でした。そう言ったんですよ。わたし、その瞬間何か分かった気がした。人生を掛ける仲間。神の働き。たぶん小林五郎にもそういう思いで神学校に飛び込んだ日があったでしょう。そして今また若いのが、同じ思いで司祭になりたいと言ってきた。だから、「今日から俺とお前は仲間だ」。

残念なことにその3年後に小林神父様は亡くなって、叙階式に出ていただきたかったから、すごく残念でした。ちょうどそのころから、わたしはだんだん

闇に包まれていって、絶望しかけていって、うつ状態で無気力にもなり、神学校からはバツ、バツ、バツ、と10個くらいバツ付けられて、院長からは「君を神父には推薦できない」と言われ、がっくりきて、「ああ、もう神父になれないのか」って思ってたとき、そこにおられる澤田神父さまが、こうおっしゃったんですよ。「こんなとき、小林神父さんが生きていてくれたらねえ」って。わたし、これまた、そういうことかって気付かされた。推薦司祭ってのは「今日から仲間」であり「こんなときの親代わり」であり、それは無条件ってことですよね。そうして神さまはちゃんと一人ひとりの中に働いて教会を守り導き、教会は次の世代、その次の世代へと福音を語り継ぎ、秘跡を授け続けてちゃんと護ってくれる。結局、小林神父さんが天で護ってくれたんだと思いますよ。わたしは叙階出来ました。

推薦司祭って、もしも我が子同然の神学生がつかずいたら、司教様のところへ行って、この子だけはどうしても叙階の秘跡授けてくれと、そう頼む。これこそが、推薦司祭の仕事でしょう。だから澤田神父さんは、「こんなとき、小林神父さんがいてくれたらねえ」、とそう言うてくださった。わたし、そういうものかと思ったとき、思わずはらはらと涙がこぼれました。

ですから、小林神父さん、わたしの叙階式を喜んでくれたと思うし、そうしてわたしもまた同じように推薦司祭にしてくれたんだと思う。わたし、推薦司祭なんですよ、この人の。(笑)この大西神学生も、なんかいろいろあるみたいですが、来年3月第1日曜日の午後2時、東京カテドラル聖マリア大聖堂での叙階式の中で、わたしは推薦司祭の役目である着付け司祭として、この人に祭服を着せることができるでしょうか。(笑)もし彼が「だめだ」って言われたら、推薦司祭は何をするか。司教様のところに行って、「わたしが推薦するこの人を叙階してくだらないなら、わたしの叙階も取り消してください」と、そう申し上げに行きます。まあ、司教様もそんなことしたら2人失うことになるから、(笑)難しい決断になるでしょうが。

皆さんに、わたしは洗礼を受けました。確信を持って、この人たちは神の愛によって救われているということ、その救いを受け入れているということ、わたしの信仰をかけて判断して、一人ひとりにていねいに命の水を注いだ姿を皆さんは覚えておられるはず。

皆さんに、わたしは聖体を受けました。確信を持って、すでに洗礼を受けている仲間たちに、これは神のみ業だ、ここに救いは実現していると信じて、一人ひとりに丁寧にキリストの体を渡してきた姿を皆さんご存知のはずです。

秘跡は、神の業です。一人ひとりに救いの恵みを味わわせるため、そして次

の世代に信仰を伝えるために、神さまが歴史を貫いてちゃんとなさっている目に見えるしるしです。ペトロは、復活の主に会って、自分は救われた、人類は救われたと、そのことに感動して、これからはひたすらそれを伝えることに生涯をささげようと、復活の主とひとつになって出発した。「主は生きている。私たちは救われた」と説教したら、その日のうちに3千人仲間に加わった。

皆さんも、救われているんだから、その救いをまだ知らない人たちにもちゃんと伝えてください。言うなれば「洗礼の推薦信徒」になって、「あなたがた救われないんだったら、わたしの救いも取り消していただいて結構です」と、それくらい言っていたらいい。そうしてひとり一人に「あなたも救われている」と伝えるとき、仲間は増えていきますよ。

ぜひ、この恵みのときに心を新たにして、もう一度、「そうだった、福音を語るんだって、言葉としるしで伝えるんだって」っていう思いを新たにしていただきたいのです。残されている時間、どれだけあるか分かんないじゃないですか。今日、やっつけていきましょうよ。やがて、本当に福音を信じてきて良かったっていう喜びの日、究極の救いの世界が我々を待ってるわけでしょう？

今朝寝てる時、いつもここの洗礼式の写真を撮っていた写真屋さんから電話が来たんですよ。今日のこの式のことです。で、もう一回寝たら、彼の夢を見た。(笑)なんか、今日のこの式で一生懸命写真撮ってて、そのうち彼が、かつての受洗者の写真をもう一度年代別に撮り直すだとか言って、聖堂の後ろの方で順番に集めて撮りだした。で、撮り終わった人はみんな祭壇前に集まって前を見てる。祭壇には劇場の舞台みたいな大きな幕がかかっている。向こうは見えないんだけど、向こうでは何かお芝居みたいな、お祭りみたいなにぎやかなことをしてて、その光が隙間からこっちにもれていて、みんなそのカーテンが開くのを待ってるっていう、そういう夢だったんですけど、ぱっと目覚めてすぐに気が付いた。いつもこの聖堂の説教で、「この祭壇は天国の入口ですよ」って話、してたじゃないですか。ミサこそ天国の窓ですよって。ああ、そういう夢だ、と。

ミサは天国の入口。もうすぐなんですよ。だから、残された時間、天国というかなんというか、ともかく神がお望みになっている救いの世界がもう始まっているっていう喜びの知らせを、ちゃんとみんなに伝えて頂きたいのです。みんな、天で応援してくれていますよ。小林神父さんも、誰もかれも。

今日そこに座っている娘さんの、お母様にわたしが洗礼を授けたのは、確か2007年でしたか。3週間前にあなたのお母様を病院にお訪ねしたとき、ほんとに喜んでくれましたよね。わたしも嬉しかった。残念ながら、ちょうど一

週間前にお母様はお亡くなりになりました。あなたが今日は、お母様の代わりに来てくれたんでしょうね。お母様もお元気ならここに来てくださったでしょう。でも、お母様は生きています。今も、ここにいます。まさにこの祭壇の前で洗礼を受け、信じて生き、試練を捧げて神に召され、今は天に生まれて永遠の世界を生きている。そしていつの日か、すべての人が一緒になるんです。幕が開くときは、もうすぐ。わたしたち、一番大事なことを大事にしないと、救いの喜びを見失う。この世のものばかり見てられないですよ。天の救いを信じて、信じて、信じて、洗礼の秘跡を受けた者として、希望を持って歩いて参りましょう。

晴佐久 昌英
カトリック多摩教会 主任司祭